

赤壁賦 羽化登仙

苏 轼

壬戌之秋，七月既望，苏子与客泛舟游于赤壁之下。清风徐来，水波不兴。举酒属客，诵明月之诗，歌窈窕之章。少焉，月出于东山之上，徘徊于斗牛之间。白露横江，水光接天。纵一苇之所如，凌万顷之茫然。浩浩乎如冯虚御风，而不知其所止，飘飘乎如遗世独立，羽化而登仙。

Chìbìfù Yǔ huà dēng xiān

Sū Shì

Rén xū zhī qiū, qī yuè jì wàng, Sūzǐ yǔ kè fàn zhōu yóu yú chìbì zhī xià.
Qīngfēng xú lái, shuǐ bō bùxīng. Jǔ jiǔ zhǔ kè, sòng míng yuè zhī shī, gē
yǎo tiǎo zhī zhāng. Shǎoyān, yuè chū yú dōngshān zhī shàng, pái huái
yú dǒu niú zhī jiān. Báilù héng jiāng, shuǐ guāng jiē tiān. Zòng yì wěi zhī
suǒ rú, líng wàn qǐng zhī mángrán. Hàohào hū rú píng xū yù fēng, ér
bùzhī qí suǒ zhǐ, piāopiāo hū rú yí shì dúlì, yǔ huà ér dēng xiān.

赤壁賦より 羽化登仙

蘇 軾

(書き下し文)

じんじゅつ あき しちがつきぼう そし かく ふね うか せきへき もと あそぶ
壬戌の秋 七月既望 蘇子 客と舟を泛べて 赤壁の下に遊ぶ

せいふうおもむろ き すいはおこ さげ あげて かく しょく めいげつ し しょう ようちょう
清風 徐ろに来たりて 水波興らず 酒を挙げて客に属し 明月の詩を誦し 窈窕の

しょう うた しばらく つき とうざん うえ い とぎゅう かん はいかい
章を歌う 少焉にして 月 東山の上に出で 斗牛の間に徘徊す

はくろ こう よこ すいこう てん せつ いち い ゆ ところ ほしいまま ばんけい
白露 江に横たわり 水光 天に接す 一葦の如く所を 縦にして 万頃の

ぼうぜん しのぐ こうこうこ きょ よ かせ ぎょ そ とど ところ
茫然たるを凌ぐ 浩浩乎として虚に馮り 風に御して 其の止まる所を知らず

ひょうひょうこ よ わす ひと う か とうせん ごと
飄飄乎として世を遺れて独り立ち 羽化して登仙するが如し

(現代語訳)

壬戌の年の秋、七月の十六日夜のこと、蘇子は友人と舟に乗り、赤壁山の下に遊んだ。涼風が静かに川面に吹き、波もたたない良い夜であった。杯を挙げ友人にすすめ、「明月の詩」や「窈窕」の一節を朗誦した。しばらくして、月が東の山の上に出で、斗牛の星座の間にたゆたう。白い露の気が川の上を漂い、水の光ははるか天へと続いている。一艘の小舟の流れは行くがままに任せ、茫々として無限に広い江上をおしわけて進めば、心は広々として空中に浮かび風にのり果てしもなく飛んでゆくような気がし、またふわふわとして、羽が生えて仙人になり、天に登って行くように思う。

(背景)

蘇東坡の号でも知られる文人・蘇軾は朝廷を風刺したかどで流刑となる。

1082年、陽暦9月初旬に友人と長江に舟を出して遊ぶ。三国時代の古戦場「赤壁」を懐古しながら、自然の悠久さの前に人の一生の儚さを憂い、人生の意義を論じた文章である。

赤壁賦は蘇軾の代表作であり、賦という韻文の一種を用いて作られた文章の美しさは古来有名である。羽が生えて仙人となり天に登るかのような良い気持ちになるという意味の「羽化登仙」は、赤壁賦のこの一節が元となっている。